

2 彼らは本当は言ってるんだよ、愛してる。って

玄徳へ書簡を届けに行つたはずの花は、なぜかお皿を抱えて帰ってきた。

「おかえり。どこへ寄り道してたの」

「雲長さんにホットケーキをもらつたんです。とりあえず休憩してお茶にしませんか？」

「ほっとけーき？」

「あ、えーっと、小麦粉を水で溶いて卵を混ぜて焼いたもので、それを私の国ではホットケーキと呼んでたんです」

花は実にうれしそうだ。笑顔の花を見て、孔明は小さく笑つた。

「うん。じゃあ、お茶にしようか」

「はい！」

満面の笑みで花はしつかりとうなずいた。

お茶を飲みながら、花は経緯を説明してくれる。

「玄徳さんのところへ行つたら、ちょうど翼徳さんがいて、雲長さんのところへおやつをもらいに行こうって誘われたんです」

「で、雲長殿のところでほっとけーきをもらつたわけだ。

雲長殿、呆れてたんじゃない？」

「いえ、そうでもないような……」

翼徳がおやつをもらいに行くのはいつものことだし、花がそれに付いていくこともままあることだ。逆に花のためにとおやつを作って届けてくれることもあるのだ。

「やれやれ」

このみんなに好かれる弟子の才能には恐れ入る。

「まあ、平和なのはいいことだよねえ」

玄徳軍きつての武将の一人はおやつを捜し求めさ迷い、もう一人はおやつ作りに精を出す。

平和だ。

孔明はちらりと自分の机の上を見た。山積みになった書簡のどの部分を雲長に回せばよいのか一瞬で考える。翼徳にはまず彼自身の仕事を片づけてもらうよう、花を監督に行かせよう。

孔明が皮肉混じりで考えていることなど知らずに、花はうれしそうにうなずいた。

「はい」

そして箸を動かす。

黄金色に焼けた丸い形のほっとけーきには、やはり黄金色の蜂蜜がたっぷりとかけられていた。蜜の甘い匂いと、小麦の焼けた香ばしい匂いが混ざって、確かにおいしそうな香りがしている。